

氏名	ピヤトーン ケウワッタナ (Piyatom Kaewattana)		
学位	博士 (日本語文化学)		
学位記番号			
学位授与年月日			
審査研究科	外国語学研究科		
論文題目	日本語とタイ語の原因・理由文の構造 —対照研究の視点から—		
論文審査委員	(主査)	大東文化大学教授 田中 寛 (博士)	
	(副査)	大東文化大学教授 須田義治 (博士)	
	(副査)	大東文化大学准教授 上村圭介 (博士)	
	(副査)	学習院大学教授 前田直子 (博士、外部審査)	

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 研究の内容、目的と論文の構成

ピヤトーン・ケウワッタナ氏の学位請求論文「日本語とタイ語の原因・理由文の構造—対照研究の視点から—」は序章、終章を含む全6章から成り、176頁におよぶ研究成果である。

本論文の目的は、日本語とタイ語の比較対照をすることによって、両言語における原因・理由表現の共通点および相違点を明らかにすることである。本研究ではこれまでの研究の蓄積である日本語とタイ語における文構造と表現の意味用法を再論するだけでなく、両言語における文構造と表現の意味・用法、そして分類方法などに関する新しい知見を構築することも含んでいる。特に、執筆者は複文の構造および接続表現に関心を持ち、原因・理由文における対照研究を中心に意味関係の生成を解明しようとした。

日本語には原因・理由文と称されるものの形態、意味用法がきわめて豊富に観察される一方、それらの相互の意味関係、特徴を理解することは外国人学習者にとって容易なことではない。対応する表現がきわめて限られており、他の表現を援用して理解されるケースが少なくない。タイ語においてもいわゆる「表現の隙間」なるものがしばしば指摘されるが、その背景の一つには文の概念把握の異同が大きく影響している。

日タイ両語における文概念は必ずしも共通しているというわけではない。基本的には文の最小の単位として単文があり、それより大きな文、複雑な文として、複文と重文がある。これは、日本語でもタイ語でも共

通した認識と考えられるが、日本語における複文とタイ語における複文は、必ずしも同質のものであるとはいえない。両言語における複文においてどのような相違点があるかを理解しなければ、原因・理由文の比較分析も不十分であろう。日本語とタイ語では、文の分類そのものも異なっている。文の分類、そして文構造の中ではそれぞれの言語においてどのように構成されているかをまず理解すること、これが本研究の重要な出発点と意義付ける。一方、日本語における研究と比べてタイ語における研究の方が立ち遅れていることを踏まえ、タイ語の言語学的研究を進展させるためにも、研究の進化した日本語と比較研究を行うことが必要であるとしている。したがって、本研究はタイ語における言語学研究を進展させるという目的もある。

以下、各章の内容を要約する。序章では研究の背景と目的、および研究の構成、使用する言語データ、例文の扱い、各種の特殊記号などについて説明するとともに、文の構造に関する概念と本研究の立ち位置について述べている。第1章は総論的な原因・理由文と表現の分類に関する比較考察である。日本語における原因・理由文および原因・理由表現は、それぞれの特徴によって分類が可能であるが、タイ語ではそのような分類はきわめて曖昧である。そのため、タイ語における原因・理由表現の用法も統一性に欠け、纏まりがない印象を受ける。本研究では、日本語における原因・理由表現の分類方法を参考に、タイ語の原因・理由表現の分類を試みたもので、また、タイ語の原因・理由表現の分類と特徴からみて、日本語における原因・理由表現の分類と特徴についても再考察するものである。本章では日本語における原因・理由表現とタイ語における原因・理由表現とはどのようなものかについて比較考察している。第2章では、原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究の導入部分として、「カラ」と「ノデ」の機能の特徴を中心にして、タイ語における原因・理由表現との比較考察を行った。日本語で最も使用頻度の高いと思われる「カラ」と「ノデ」のそれぞれの特徴、共通点、相違点について考察し、タイ語における原因・理由表現を同様に考察した。さらに、原因・理由を表す述語のテ形、また原因・理由を表すマーカが表記されない原因・理由文についても述べた。第3章では、日本語における〈事態系〉の原因・理由表現を中心に、タイ語と比較考察した。主に、日本語の事態系の原因・理由表現はどのようなタイ語の原因・理由表現に訳されるかを検討し、両言語の表現の間に横たわる共通点と相違点を明らかにすることを試みた。対照研究の対象として、日本語における事態系の原因・理由表現である「タメニ」「セイデ」「オカゲデ」「アマリ(ニ)」「ダケニ」「ダケアッテ」を抽出し、タイ語と比較考察した。第4章では、日本語における〈判断系〉の原因・理由表現を中心にその特徴について述べ、判断系という原因・理由表現、およびそれらの表現に近い表現がタイ語にあるか如何かを検討した。具体的対照研究の対象として、日本語における判断系の原因・理由表現「ノダカラ」と「カラコソ」を抽出し、タイ語と比較考察を行った。終章では各章のまとめ、及び本研究全体で明らかにされたこと、さらに残された諸問題とともに今後の研究課題について述べている。全体を通じて、原因・理由文の構造を明らかにし、文構造の基礎となる構文マーカの所在と生起関係をつぶさに観察しながら、主観性、客観性の問題を周到に議論している。この方法論は対照研究における複文研究の今後の可能性を示唆している。

3. 研究の成果と意義

以上の考察から判明した成果は以下の6点に要約される。

(1) 日本語における原因・理由文は複文構造の典型であり、「カラ」や「ノデ」「タメニ」をはじめとして日常頻繁に用いられる構文である。基本的には従属節が原因・理由節であり、主節が結果節である。このほか、テ形による接続で原因・理由を表す場合もある。また、日本語における原因・理由表現は、〈事態系〉、〈判断系〉、さらに〈原因・理由を表さない系〉の3種類に分けることができる。一方、タイ語では、節と節の関係が原因と結果で構成されている文は複文と重文とに分けられる。この違いは、原因・理由表現自体の意味・用法に直接の関わりがないが、日本語とタイ語の間にある原因・理由文に関する概念の違いを考察する際に関わってくる。本論文ではこの文の生成、環境の相違を明らかにした。

タイ語の複文は日本語と同様、主節と従属節に分けられる。ただし、タイ語における原因と結果の関係で結び付く複文は、結果節が必ず主節になるとは限らない。タイ語では、原因・理由節と結果節を接続する際に用いられる表現は基本的に「原因・理由表現」と「結果表現」の2種類に分けられる。表現自体が表す意味から考えた場合、「原因・理由表現」は原因・理由を表す表現であり、「結果表現」は取り出された結果を追認、提示する表現である。さらに構造的に考えた場合、「原因・理由表現」は後節が原因・理由節を示すのに対し、「結果表現」は出来た結果を結果節として示す。原因・理由表現を複文の接続表現として用いる場合、その文は日本語と同様、主節が結果節である。逆に、結果を表す表現が接続表現の場合、主節は原因・理由節になる。本論文ではこうした節の関係を詳しく考察した。

タイ語における因果構文の分類を概略まとめると、複文構文と重文構文に分けられる。複文の因果構文は原因・理由構文と結果構文の2種類があるのに対し、重文の因果構文は結果構文のみである。それぞれの構文には定型的な接続表現が存在し、用いる接続表現によって構文の分類が決定されるといえる。その典型である *phrǎ* は複文の原因・理由構文に、*con* は複文の結果構文に、*cuŋ* は重文の結果構文に接続表現としての使用が限定される。本研究はこれらの意味的なメカニズムについて検証した。

(2) タイ語の重文は、主節と従属節に分類されるだけでなく、それぞれが対等である節と節から構成

される構文という定義がある。Phrayaa Upphakitsilpasan (1937) 及び Kamchai (2009) によれば、重文は一つの文として成立している節が二つ以上から構成されている構文であると述べている。しかし、この重文の定義に関しては不可解な点が多い。まず、タイ語における複文構造である原因・理由文でも、原因・理由節と結果節がそれぞれ一つの文として成立している場合が多く見られ、この定義だけでは複文と重文を区別することができない。加えて節と節がそれぞれ対等であるかどうかに関する定義も明らかではない。原因・理由構文と結果構文は、いずれも原因・理由節と結果節から構成されている構文であるにもかかわらず、原因・理由構文だけが複文で、結果構文だけが複文である場合が存在し、重文の場合もある。第三に、日本語の場合、重文は対象要素が並列的に並ぶ構文に限られるが、タイ語では並列ではなくても、逆接構文も重文として扱う傾向がある。日本語では、「大地は割れ、海は涸れた」など、それぞれの節がそれぞれ互いを従属せず、対等である場合のみに重文として扱うと考えるが、タイ語の場合ではそれが因果関係で結ばれている場合でも重文として扱う。しかし、節と節が対等であるかどうかで複文か重文かを分けるのであれば、結果構文が重文であるという説明がつきにくくなる。このようにタイ語における複文と重文に関する分類は、複雑な問題が介在する。特に日本語と比較考察する際には、この問題が要因となって様々な不合理が生じる。節と節の対等という定義から離れて、用いる表現によって文の分類が決まるという定義を重視したほうが適切であり、複文か重文かという領域を越えた日本語と比較考察が可能と考えられる。本研究はこうした立場を立証するのに有益な観点をもたらしている。

(3) タイ語を日本語と比較した場合、複文であっても重文であっても、原因・理由と結果の関係で節と節が結び付けられているのであれば、いずれも日本語の原因・理由文に対応すると考えられる。ただし、重文にみられる結果表現で節と節を結び付ける構文は、日本語の原因・理由文と同じ節順を持つが、*phrǎʔ*構文などの複文は日本語と逆の節の配列を持つ。この節の配列、つまり節順に関する相違点は、文全体の意味に関わらない場合が多く、「結果節+*phrǎʔ*+原因節」の構造であっても、「原因節+*cuŋ*+結果節」であっても、意味的には「原因節+から+結果節」に対応する。ただし、前節と後節が並列的に原因と結果の関係だけではなく、前後の継起関係もある文構造の場合、「結果節+*phrǎʔ*+原因節」の構造では日本語文に対応できない場合がある。たとえば「風邪をひいて、学校を休んだ」のような場合は、原因から結果の順番で節が並んでいて、継起関係もあるが、「結果節+*phrǎʔ*+原因節」はその構文とは節順が逆であるため、同じような継起関係は成り立たない。本研究ではこうした関係を多くの実例を用いて検証した。

(4) タイ語の原因・理由表現は、単独で用いること以外に、二つ以上の表現を組み合わせて用いることも多い。これらは形式的には二つ以上の表現を結合に用いる〈複合タイプ〉と、文中に別々の位置で生起しながら意味・用法が連携する〈共起タイプ〉との2種類に分けられる。例えば、*phrǎʔ-chà'nán* や *phrǎʔ-chà'nán-cuŋ* などは複合タイプであり、日本語の接続詞類に対応し、*phrǎʔ~cuŋ* は共起タイプで日本語の接続助詞類に対応する。基本的に複合タイプと共起タイプの形式内部では、いずれも基礎となる表現が一つだけ存在すると考える。その基礎表現（フレーム表現ともいう）以外の部分を取り除いても、文全体の意味は殆ど変わらない場合が多い。要するに、基礎表現はそのまま同じ文で複合タイプと共起タイプの表現形式の代わりに用いられるといえる。例えば、*phrǎʔ-chà'nán-cuŋ* と *phrǎʔ~cuŋ* は両方とも *cuŋ* がであり、*phrǎʔ-chà'nán* と *phrǎʔ* を除いて、*cuŋ* だけを残しても同じ意味の文で用いられる。複合タイプと共起タイプの形式内部では最も重要な役割を果たしている表現が基礎表現になるとし、主として節と節の関係を示す表現、または節と節を接続する表現が基礎表現になりやすいという見解を示している。この複合タイプ、共起タイプの形式は文に対する依存レベルが介在することも考えられる。基礎表現は文の中でフレームを構成する重要な役割を持ち、省略は許され難いため、複合タイプ、共起タイプの形式内で最も依存レベルが高い部分は基礎表現であるといえる。基礎表現となる条件は不確定であるが、依存レベルを考慮すれば文構造を説明する重要な手がかりとなろう。こうした複合タイプ、共起タイプに注目した点は新しい複文研究の知見である。

(5) 日本語の場合、「カラ」と「コソ」から構成されている「カラコソ」などの複合的な表現が存在するが、タイ語と比べて構成の法則と構成された表現の意味・用法に関する定義は、タイ語の複合タイプとは異なっている。タイ語では意味的に表現を結合して用いる場合、その複合的な表現の意味・用法が基礎となる表現に依存している上に、意味・用法が変わる場合が殆どない。さらに、*phrǎʔ~cuŋ* や *daŋnán~ləəy* など、タイ語に共起タイプの表現があるのに対して、日本語では「(セツカク) XカラニハY」や「YノハXカラダ」などの表現形式が見られる。これらの表現に関しても、日本語の方は慣用的な意味・用法で用いるものが多くあり、既存の形式で用いられるものも多い。これに対し、タイ語の共起タイプの表現は基礎表現であり、それ以外の表現は基礎表現を補完するために用いられているケースが殆どである。日本語の表現形式は部分的な省略が許されず、一定の意味・用法で用いられているのが一般的である。これに対して、タイ語の *phrǎʔ~cuŋ* や *daŋnán~ləəy* などは、基本的には基礎表現と同じ意味・用法で用いられるものが殆どであり、日本語と比べて置き換えの柔軟性は高いが、個別的な意味・用法は殆どないといえる。

(6) 日本語には「ノダカラ」という判断系の典型的な表現があり、事態系の原因・理由表現と区別することができる。これに対し、タイ語の *phrǎʔ* や *cuŋ* などはいずれも「カラ」と同様で、事態系または判断系の原因・理由文のいずれにも用いられるものが多い。言い換えれば、事態系と判断系という限定的な特徴で

区別できる表現はタイ語にはないとする。そのため、日本語とタイ語の表現を比較考察する場合、事態系と判断系を重視せず、原因・理由を表す機能が（中心的）機能で、判断の根拠を表す機能が（副次的）機能であると考えられる。こうした特徴をふまえ、原因・理由を表す以外の機能を重視して、日本語とタイ語の表現を比較考察すべきであろう。タイ語の因果関係を表す表現は、単独な機能しか持たないものが殆どであり、日本語における因果関係以外にも何らかの意味・用法を表わす表現と比較する場合、タイ語の因果関係を表す表現の単体だけでは十分にそれらの日本語の表現に対応できないことも多い。「オカゲデ」「セイデ」「アマリ（ニ）」「ダケニ」「ダケアッテ」「カラコソ」はいずれも特徴的な意味・用法があり、これらの表現を訳す場合、原因と結果の関係しか表さない *phrəʔ* や *cuŋ* などだけでは、当然表現しつくせない。*phrəʔ* や *cuŋ* 以外にも、それぞれの日本語の表現の（副次的）機能に対応する表現も考慮すべきであるとする。例えば、「ダケニ」には程度を表す意味・用法があるため、*phrəʔ* と *cuŋ* のほかに *yŋ* や *səm* などの表現もその内容に合わせて用いるべきであるとする。これは話し手の判断の根拠を表す機能も、語用論的用法への拡張可能な（副次的）機能の一つと扱うべきであろう。これはタイ語が日本語にあってタイ語に存在しない接続構成要素の隙間を、文前後の意味的な関係から認識されるという特性が際立っていることの一証左である。

4. 審査会における意見

本研究では、事態系と判断系という日本語の分類方法を基準にして、タイ語の表現と比較考察したが、結果として、事態系という分類をタイ語の表現に関連付けることは難しい。元来、日本語における事態系は、話し手の判断とは関係なく、原因と結果の関係を表す表現を生成する。この分類を基準にしてタイ語と比較した場合、殆どの因果関係を表す表現がこの部類に入ることになるため、分類の必然性がさほど見られなくなる。一方、判断系は、話し手の判断の根拠も表す原因・理由表現を示す。言い換えれば、原因・理由を表すという（中心的）機能のほかに、話し手の判断の根拠も表す（副次的）機能も持っている表現を示すともいえる。本研究では因果関係だけを表すのか話し手の判断の根拠も表すのかという違いでタイ語の表現と比較考察すれば、タイ語の表現の分類も可能であることを試みたが、原因と結果の関係を表す表現の殆どが事態系であるという結果に行き着いている。

本研究は日タイ語対照研究において複文に関する、おそらく初めての本格的な研究といえる成果であり、タイ国における日本語学研究の前進にも寄与するものとして評価される。また、この複文現象の比較検証とその手続きはタイ人に対する日本語教育のみならず、日本人のタイ語教育にも役立つところが大きいといえよう。なお、「コトカラ」「コトデ」など日本語では格助詞、タイ語では前置詞を用いた単文表現、さらに「モノデ」「ヲ理由ニ」「ヲロ実ニ」、「カラトイッテ」、「XカラYノダ」と「YノハXカラダ」構文の相関、さらに「ナゼナラバ」「ダカラ」といった接続詞群など比較考察すべき課題が残されているが、本論文は日本語の原因・理由文の構造をあらためて見直すと同時に他言語との対照比較を通じて、複文への視界をさらにひろげていく意味でも貢献が認められる。副査の上村圭介准教授は主として言語データの扱いの視点からいくつかのコメントがあった。須田義治教授は日本語学の立場からの印象として、あらためて複文、重文の境界を精確に記述する方向性を求められた。外部副査の前田直子教授は言語学研究会の成果を再吟味する課題を提示された。また使用用語の統一などの指摘があった。主査は総合的に本研究を評価し、さらに複文研究のさまざまな領域に進む可能性を示唆した。審査会において若干の字句語句の修正、注記参考文献の補充などの要請がなされたものの、早期における修正の範囲内であり、総体として本論文の価値を損なうものではなく、今後の研究の展開の可能性を感じさせる成果である。ピヤトーン氏は日本語の運用能力に秀で、日タイ、タイ日の翻訳にも優れた言語処理能力を有する。氏の出身母校であるタイ、チェンマイ大学の信望もあつく、将来の日本とタイの学術交流に大きな期待が寄せられる逸材である。

5. 結論

口述試験は2016年1月26日大東文化会館で行われた。各委員の意見整理は主査田中寛指導教授がおこない、内部副査、外部副査の確認を経て、本報告書を作成した。以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって本論文は博士（日本語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。（平成28年2月11日）

以上

添付資料 博士後期課程在籍期間中の学術業績

(A) 学術論文（全て単著）*は外部査読論文

発行掲載年月日	著書・学術論文・研究報告等	掲載誌名	発行所
2014年3月20日	「接続表現をめぐる日タイ対照研究—原因・理由節で用いる接続表現を中心として—」	『外国語学研究』 第15号 pp.201-207	大東文化大学大学院 外国語学研究科

2014年3月31日	*「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—日本語における「から/ので」とタイ語における“phro”を中心に—」	『日タイ言語文化研究』第2号 pp.153-163	日タイ言語文化研究所
2014年9月30日	*「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究—原因・理由文の分類について—」	『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第11号 pp.131-136	国際交流基金バンコク日本文化センター
2015年2月28日	「事態系の原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「せい」「おかげで」に対応するタイ語の原因・理由表現を中心に—」	『語学教育研究論叢』第32号 pp.1-22	大東文化大学語学教育研究所
2015年3月20日	「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究—タイ語の因果構文を中心に—」	『外国語学研究』第16号 pp.145-150	大東文化大学大学院外国語学研究科
2015年3月31日	「原因・理由表現の日タイ語対照研究—タイ語の因果構文の特徴と分類の考察を中心に—」	『語学教育研究所創設30周年記念フォーラム』pp.283-298	大東文化大学語学教育研究所
2015年7月25日	*「事態系の原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「ため(に)」と対応するタイ語における原因・理由表現を中心として—」	『日タイ言語文化研究』第3号 pp.131-142	日タイ言語文化研究所
2016年3月発行予定	「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「だけに」と「だけあって」を中心に—」	『外国語学研究』第17号 pp.++	大東文化大学大学院外国語学研究科
2016年3月発行予定	「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「のだから」を中心に—」	『語学教育研究論叢』第33号 pp.++	大東文化大学語学教育研究所

(B) 口頭発表 (全て単独)

発表年月日	発表題目	大会・研究会名	主催者
2013年7月13日	「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—日本語における「から・ので」とタイ語における“phro”を中心に—」	第2回 日タイ言語文化研究会東京大会 於.大東文化大学板橋校舎	日タイ言語文化研究所
2013年10月27日	「接続表現をめぐる日タイ対照研究—原因・理由節で用いられる接続表現を中心に—」	第5回「東西文化の融合」国際シンポジウム 於.大東文化会館ホール	大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻
2014年7月19日	「事態系の原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「ため(に)」と対応するタイ語における原因・理由表現を中心として—」	第3回 日タイ言語文化研究会東京大会 於.大東文化会館	日タイ言語文化研究所
2014年10月26日	「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究—タイ語の因果構文を中心として—」	第6回「東西文化の融合」国際シンポジウム 於.大東文化会館ホール	大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻
2015年7月22日	「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究—「だけに、だけあって」とタイ語表現の比較を中心に—」	第4回 日タイ言語文化研究会東京大会 於.大東文化会館	日タイ言語文化研究所
2015年9月27日	「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究—「からこそ」とタイ語表現の比較を中心に—」	日本語/日本語教育研究会 第7回研究大会 於.学習院女子大学	日本語/日本語教育研究会
2015年11月8日	「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—述語のテ形を中心に—」	第7回「東西文化の融合」国際シンポジウム 於.大東文化会館ホール	大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻